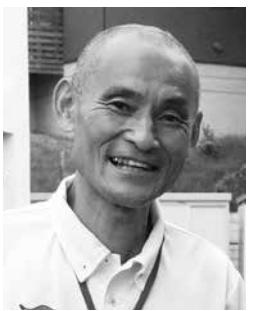


走る教師から、走る公民館長へ ～ランニングと共に歩んだ38年間～

元島伸治
(高31回)



●もとじま・しんじ
上郷町出身。誕生は大鹿村大河原。中学校教師の父の転勤で幼少時は飯田市追手町、清内路(上清・下清)、豊丘、千代と引越し。千葉大学教育学部卒。小学校教員として38年間勤務。現在は千葉市椿森公民館長。

ランニングの楽しさの原点

ランニングに目覚めたきっかけは2つあります。1つは、皆さんも経験した飯田高校時代の強歩大会。私たち31回生が高3を迎えた昭和53年に、徹夜から昼間に転向されました。私はラグビー班(樂苦美班とも表現)に所属しておりました。初めて走った1年の大会、1学年上の先輩と未明に遭遇し、松川町あたりで夜明けを迎えました。既に50km走破して体中くたくたです。先輩と道路に寝そべり、暁を迎えることができました。

たつた今でも瞼に焼き付いています。2年の大会では6時間6分で全区間走破できました。強歩大会では、ひたすら走り続ければ、必ずフィニッシュに辿り着けるとい

う達成感を知ることができました。
もう1つの原点は、更に過去を遡り小学6年生の頃。母校上郷小学校は、新校舎建設のさなかで校庭が使えず、臨時運動場までは離れているため、日々の運動不足解消にと、毎朝、全校マラソンを実施しておりました。上郷町役場から飯沼に向かう坂道を前半はクラスごとに並んで駆け下り、後半の上りはマイペースが許される学級ルールでした。背の順で最後尾からスタートし、高陵中学校正門付近、飯田線上鉄橋のゴールまで一気に駆け上る快感を味わっていました。不思議とこの毎日の繰り返しが、その後の人生でも常にラストスパートでフィニッシュするという生き方に結び付きました。

コロナ禍での小学校は

大學卒業後定年を迎えるまで、仕事は小学校教員一筋、学校現場で常に、無邪気な小学生と教職員に囲まれ、給

食を食べて38年間。最終章の1年間がパンデミックの中での暦になるとは……。感染状況や教育委員会の情報など、刻々と変化する対応に追われた毎日でした。

令和2年度は臨時休校でスタートしました。子どもが居ない学校は無味乾燥で、味気のないものです。6月から分散登校が再開され、千葉市では6月8日に入学式が行われました。私が校長を務めていた星久喜小は、入学児童が100名を超えます。そこで、入学児の親御さんの参列を優先し、感染防止を徹底するため、1年1組入学式、1年2組……と、入学式をクラスごとに3回に分けて行いました。

コロナ禍だからこそ「クリアアイス」

子どもは順応が早いです。並ぶときはいつでもどこでも2m空けてのソーシャルディスタンス、常時マスクを着けての生活。給食は、みんな同じ向きで自分の机に向かい黙つて食べる(黙食)。授業は昭和時代に逆戻り。ひたすら黒板を向いての一斉授業。学習指導要領の目玉である「対話的主体的なアクティブラーニング」はどこへやら……。教室では歌もうたえないし、リコーダーも吹けない。鑑賞やリズム打ち程度の音楽学習。常に様々な制約が降り注ぎます。子どもたちが楽しみにしている校外学習は全て中止となりました。私は毎朝、校門で全校児童を迎えているのですが、ハイタッチ



千葉市立星久喜小学校
校長室にて

て立派なリアクションです。マスクで半分以上隠れてしまった顔ですが、目は見えています。相手の表情をうかがうと、ニコッとした笑顔こそ、心が落ち込みやすいコロナ禍では、子どもたちも大人たちも安心につながりました。

信州人でよかつた……得したこと

平成14年度から千葉市の小学校では、長野県への農山村留学がスタートしました。千葉市の教育長が2代続けて長野県出身者であった、人のつながりのおかげです。

当時は弁天小の6年担任でした。単学級の4つの小学校が合同で、佐久地方の望月町と浅科村に行きました。浅科村では、村内有志の方々が実行委員会を立ち上げ4泊5日受け入れてくれました。海こそあれ山々に囲まれた経験のない千葉市の子どもたちですから、千曲川が流れる大自然を味わった感動といつたら図り知れません。

浅科村の方々との交流を通じて、信州人の懐の広さとぬくもりを改めて味わいました。「私は長野県出身で飯田高校の卒業生です」と語れば皆さんが大歓迎してくれて、一緒に『信濃の国』を声高らかに歌った5日間でした。隣の望月町では、留学期間中に徹夜でフルマラソンの距離を歩き通す行事が行われ、地元の参加者やホーム

ステイ先の御家族と一緒に千葉市の6年生も参加しました。その後、教務主任として赴任した越智小では平成19年度は懐かしき伊那谷の飯島町・中川村・箕輪町に、翌20、21年度には、長野市・生坂村・青木村にお世話になりました。2年続けてお世話になつた青木村においては、宿泊施設の「田沢温泉富士屋ホテル」やホームステイ先、国宝三重塔で有名な大法寺、道の駅「あおき」の方々など、今でも交流させていただいております。私が生まれた母の故郷、大鹿村も受入先の一つでした。

このように千葉県人になつてから改めて、信州の温かい人柄や里山を中心とした大自然の素晴らしさを噛み締めることができました。それを教師として多くの千葉の子どもたちに伝えられたことは、私の教員人生の中でも、ランニングと共に燐然と輝く誇りです。

走ることは学ぶこと

24年間に及ぶ担任時代は、体育の学習に「ミニ駅伝」を取り入れました。体力づくりに有効なだけでなく、チームワークや励ましあう思いやり、勝つための工夫・思考力・所属意識や責任感、最後まで粘る忍耐力などが養われたと思います。

地域のランニングクラブ（土気AC）でも、子どもた

ルであり、苦楽を共にする最大の理解者でもあるのです。

今、公民館長として……迎える姿勢を崩さず

千代小学校に入学後、千葉県内10の小学校での教師人生含め、学校という世界から54年間全く出たことのなかつた私は、60歳になつて日々修行の連続です。公民館は市民サービスを担う社会教育の原点ですから、日曜日や祝日もありません。週休日は自分磨きの時間です。ランニングとロードバイクで肉体改造をしています。

千葉市では公民館運営としての心構えを4Sと称しています。4つのSとは何でしょうか？ ①Service（サービス）②Safety（安全）③Sure（確実）④Speed（迅速）が正解でした。具体的にどんな行動で示すのか……まだ模索中です。ちなみに校長時代に千葉市教委と連携して目指した4Sは、①speed（誠意をもつて迅速に）②spirit（一貫性のある教育を）③スクラム（チーム学校で）④security（安全安心）でした。ぶれることなく持ち続けた心構えが「子どもを迎える」でした。教師を卒業しても公民館で、地域の人たちを笑顔で迎えたい。この生き方は、これからも人生のモットーとして、ランニング同様に続けたいと決意を新たにしています。



土気ACは走ることでつながった大きな家族のようす